

厚生科学研究費補助金（新興・再興感染症研究事業）

研究報告書

「効果的な感染症発生動向調査のための国および県の発生動向調査の方法論の開発に関する研究」

性感染症発生動向調査の評価

主任研究者 岡部信彦

分担研究者 小坂 健（国立感染症研究所感染症情報センター・研究員）

共同研究者：橋戸円（感染症情報センター・研究員）、

中瀬克己（感染症情報センター・研究協力員、岡山市保健所 次長）、

中谷

公文裕巳（岡山大学大学院 教授）、

津川昌也（岡山大学大学院 講師）

牧野由美子（島根県益田保健保健所 所長）

内野英幸（長野県大町保健所 所長）、

研究要旨

性感染症に関する発生動向調査の評価を目的に、評価方法の検討を行い、定点把握と運営および調査結果活用の現状を調査した。また、一部地域で発生動向の全数把握調査を行った。

A . 研究目的

性感染症（以降 S T D と記載）は、先進国において性行動の活発化に伴う増加が指摘されており、特に我が国では低容量経口避妊薬導入の影響が懸念されている。また、有症状率が低い、未受診患者が多いなど発生の把握が困難である点、必要とする対象への結果の公開・提供が重要な点が、「性感染症に関する特定感染症予防指針」においても指摘されている。本研究では、S T D に関する発生動向調査の運用上の具体的課題、報告データの妥当性の検討を行い、後天性免疫不全症候群に関する報告との関連および他の調査等の活用を含め総合的観点からのシステムの評価、改善の提案を行う。

B . 研究方法

S T D サーベイランスシステム評価の総括的研究および地域別詳細研究を行った。

総括研究として S T D サーベイランスおよび H I V サーベイランスの評価に関する勧告を、WHO、U N A I D S , C D C など国際機関や参照されることの多い機関からのものを対象に検討した。また、各国の具体的な S T D サーベイランスシステム評価の方法論的研究を文献的に行い、一部の国ではサーベイランス担当者からの聞き取りにより検討した。梅毒を例に、勧告に沿った評価を行った。

我が国における S T D サーベイランス情報の妥当性と活用状況を検討するため、全都道

府県の感染症発生動向調査担当部局を対象としたS T D定点選択の方法、全保健所を対象としたS T D定点情報の収集・評価、活用の現状を、おのおの質問紙調査により、他のグループとの協力によって把握した。

地域別詳細研究として、S T D定点報告からの罹患率推定およびS T D罹患リスクがどの程度反映しているかを評価するために、岡山市および長野県大町保健所管内を調査地域として、対象地域内の産科・婦人科、泌尿器科、皮膚科を標榜する全ての医療機関を調査地点として、5週間におけるS T D患者の全数調査を行った。

倫理面への配慮

総括的研究は、公開情報および行政機関が公開する情報を基に行い、個人特定情報の利用や特定集団への不利益に結びつかないよう配慮した報告とするなど倫理的問題が生じないようにした。地域別詳細研究では、対象となる個人へ調査協力を求め、了解の上協力の得られた調査票を分析の対象とする。また個人が特定される情報は医療機関からは収集しないよう倫理的配慮を行った。

C . 研究結果

総括研究

S T Dのコントロールへの有用性という観点からのサーベイランスシステム評価が国際機関における共通理解であること、S T DとH I Vのサーベイランスを関連づけて評価すべきこと、法に基づくS T Dサーベイランスのみでなく研究事業など多様な既存情報を含めた広い観点のサーベイランスとして評価すべきこと、等が明らかとなった。

梅毒サーベイランスを例に、上記勧告に沿って検討した。梅毒は、全数報告疾患として大規模な発生動向の変化を検出できる可能性は否定できないものの、過去の定点サーベイランス調査と比較した結果補足割合が低いと考えられ、罹患の地域、年齢に関する代表性に疑問がある。サーベイランス結果のH I Vと関連づけた解釈や予防など対策への活用は、自治体において一般的ではない、と評価された。

都道府県、保健所対象の質問紙調査は、回収率約80%で現在集計中である。

地域別詳細調査

調査回答率はおよそ75%であった。調査結果は現在集計中である。

また、発生動向調査改善のための検討点として本年度の研究協力者から以下の意見があった。

診断基準の精度、定点報告疾患の評価および全数報告疾患評価を検討する必要がある。

現行の定点報告は、情報の内容が限られ不十分さがあるものの継続したサーベイランスは重要である。今回の地域研究のような詳細研究は、対策立案に有用であるが負担が大きく継続は困難である。相互の補完とS T D罹患への介入研究が課題である。H I V診療は内科が主体であり、S T D診療は婦人科・泌尿器科が主体と分離している。H I V / S T Dの感染予防と治療とを一貫して行うには、包括的な体制が必要である。

D . 考察

本年度は、性感染症サーベイランス評価の世界的な標準を確認し、性感染症発生動向システムの現状と課題を評価するための資料を得た。広い全国状況の検討と地域限定ではあるがより詳細な検討と組み合わせて評価を行ってゆくことが、効率的と考えている。性感染症と総称するものの、疾患によって特性や把握方法は異なっており、性行為による感染が主である後天性免疫不全症候群対策との調和も必要など検討課題は多い。感染から対策への流れと疾患毎の差という2つの視点を持って課題を整理することで、改善の枠組みを明確にしてゆくことが有用と考えている。

E . 結論

「STDサーベイランスは、STDのコントロールへの有用性というその目的を明確にした上で、HIVとの関連、既存の他の調査等を活用した広い観点のサーベイランスとして評価すべきこと」という国際的な標準が明らかとなった。梅毒を例に評価した結果、梅毒コントロールへの有効活用は一般的でなく、代表性にも疑問が多く改善を検討すべきと考えられる。次年度は、本年度調査結果を踏まえた現行サーベイランスのシステム評価を行い、感染症発生動向調査によって担える部分と他から情報を補完すべき部分とを検討し、現行発生動向調査の改善の試案を作成する。中央感染症情報センター、地方感染症情報センター、関連研究担当者および関連学会学識経験者等を交えて、改善案の妥当性を検討する。これを踏まえ、最終年度に改善案を提案する。

F . 健康危険情報 無し。

G . 研究発表 無し。

H . 知的所有権の取得状況 無し。